

美術の窓(36)

サン・サヴァンの壁画の世界的文化財
指定式に出席して

大和文華館 吉川 逸治

先年「美のたより」で紹介しました中部フランスの古寺、サン・サヴァンのロマネスク壁画が、今夏ユネスコの世界的文化財の一つに指定される式を挙げるから、この壁画研究の長老として出席を招請を受け、当館の理事会からも旅費援助をいただき、出席することとなり、サン・サヴァンの指定式に出席して、町の人々に久闊を序し、午餐会に招かれました。

今回の指定を予想して、町では二年前から「国際壁画研究センター」を設立し、古い修道院の建物を修復して、陳列所・研究室・宿泊所を整備し、専門関係の充実に近くの中都市ボワティエの国立文化財研究所や国立大学の協力を得る仕組みになっているとのこと。ボワティエ大学の中世文化研究所は国際的に有名で、わが国の高名な美術史学者も幾人か、かつてここに研修の月日をおくっています。現在この研究所の所長ファヴロ教授は古文書学の権威で、サン・サヴァンの碑文の精密な研究があり、教授自身サン・サヴァンの出身なのでセンターの事業に学問的に協力しておられます。

式後また、教会堂の大壁画の補修清掃に数年間従事していたクリステン女史に再会し、早速、入口の塔階下の壁画も清掃され、「再臨のキリスト」の衣の下から模様が見え、ウィンチェスター画派の特徴がある図様も認められることを告げ

て、礼をいいました。直接清掃に当たったのは助手をしていた日本の画家で、彼は今、東部の一会堂の壁画の修補に当たっていますとのことでした。

思い出すのは、戦前塔階上〔旧礼拝所〕の壁画の模写に従事していたソカールさんに会ったことで、その時この壁画について親しく教へていただき、特に衣服に塗られている美しい白色のハイライトのワラビ状のモチーフについて語り、特にこれに注意するよう教えて下さったことです。後に、このモチーフの起源を探して、イタリアを通過して、トルコの洞窟教会堂群の古壁画にその祖型を見出した時は、中世前期のキリスト教世界の東西交流の複雑さに打たれました。この文様化された幾何学形ハイライトは、13世紀のアラビアの物語写本の豪華な挿絵では、衣裳を飾る彩色模様と変じています。

サン・サヴァンの壁画は、11、12世紀に涉って、ロマネスク絵画が形成され、成熟してゆく経過をよく示しています。西ヨーロッパは、ゲルマン人の侵入によって古代ローマの権威が没落し、それまでの古典美術の伝統が衰滅して、ケルト・ゲルマン系の文様の美術が蔓延します。しかし、8～9世紀のカロリング帝国の出現は古典文化の復興に努め、人間像の美術の再建を行います。そのカロリン



サン・サヴァン教会堂と旧修道院

ガ帝国は一世紀後、解体消滅して再度、西欧社会を混乱におとし入れ、10世紀のドイツ帝国の成立、フランス王国の設定によって、諸候勢力の定着した発展が見られ、美術も主として大修道院を中心として新たに形成されることとなりますが、古代ローマ美術（キリスト教美術も含まれます）の古典様式の遺産を新しい目的に適應する様に変化させながら継承します。この再構成の努力のなかには、かつて台頭したケルト・ゲルマン系の抽象的文様構想が底流として影響を与えているのも見逃せません。

古典美術は人間像を中心とする美術で、人間像は観念の荷い手として思想伝達の任務を負います。そして人間像の確立のため、立体表現と環境の空間表現を現実的に描出します。古典文化を継承する西欧中世は、ロマネスク絵画に宗教的観念の伝達、封建的権威の主張のために人間像による思想表現の役割を強化しますが、物質的環境の描出は抑制します。人間像は画面の主役として表はされ、天地・樹木・建物などは形も大きさも人像に準じて定められ、造型要素として、画面に配置されて、人間像の演出する精神表現を補足する役を演じます。

古典様式の絵画が要求する明暗描法は、ロマネスク絵画では鉄線描と平塗彩色法に置換えられ、画面（壁画）は平面性を守って、図

形化された人物とその附属物をもって、聖書や教義を物語らせ、韻律ある秩序のもとに簡明な表現を作りあげます。そこでは写実に顧慮することなく、人間とその衣裳、附属物の形などほとんどすべてを前代の古典絵画から採用して、卒直に線・色・形の構成による新鮮な造形美を発輝することになります。この点が近代美術の鑑賞者から特に愛好される点です。

西欧世界が、12世紀以来、十字軍時代に突入して、借用した古典的人間像の意志表示を強化したタイプに情緒の現れを加えても、変動する社会情勢に應ずる人間像を表わすことは難かしくなってきました。12世紀後半からは、絵画と工芸の枠を払って、強い線と強い色面と強い光から構成されるステンドグラスの芸術が進出して、ロマネスク絵画の到達する終着点を迎えます。

新しいゴシック様式の会堂建築の成立とともに、新しい社会的現実に応ずるゴシック人間像が厚い毛衣をまわって石彫として現れてきます。ロマネスク絵画はイタリアで遅くまで抵抗しますが、チマブエを最後として、もう一人の大画家ジョットの創作する立体と空間を充実した新しい現実を荷う人間像の絵画にその地位を譲りました。ゴシック絵画の誕生であり、古代古典絵画復興への第一歩が踏み出される訳です。

季刊 美のたより No.92

平成 2 年 9 月 6 日

発行 大和文華館